

## キューバにおける都市農業・有機農業の歴史的位相

Historical Phase of the Urban and Organic Agriculture in Cuba

新藤通弘

Historical Phase of the Urban and Organic Agriculture in Cuba

Abstract

Recently, in Japan, some peoples who visited Cuba reported and wrote enthusiastically their experience and investigation on the organic agriculture in Cuba. The author, however, indicates that the academic study must be objective without inclining into the over subjective evaluation of the realities, though he evaluates highly their good intentions for the sustainable agriculture and the socialism in Cuba.

This article describes the historical phase of the change and development of the whole agriculture in Cuba in the decade of 1990 which Cuba was forced to take in the crisis of the “Special Period in Peacetime”. This serious difficulties were caused by the disarticulation of the so called “socialist block” led by the USSR due to the over dependency of Cuba on the trade relations with these countries.

In this crucial time when all imported materials including the chemical products for the agriculture and the petroleum were drastically reduced, the most high priority task in Cuba is to maintain the food production and guarantee its supply to the people, defending the national sovereign against the threat of the possible US government intervention in the midst of the chaotic economic difficulties in the country. Under this circumstance spontaneously the urban and organic agriculture was started as the measure of the production, but not as the object self of the organic production.

The defined area of the urban agriculture in Cuba is far extensive than our urban notion in Japan such as whole Havana Province is included in the urban agriculture area and also in Cuba the urban area is defined as area where more than 2000 habitants live, also different to our conception of 5000 habitants. Move over, not all urban agriculture was operated by the organic method as frequently not few peoples reported it as organic agriculture, because sometimes when the damage by the diseases and harmful insects occurred, in many production sites the producers use the chemical germicides to maintain the food production.

There are not still the national standard of the organic agriculture in Cuba because of which the Cuban peoples tell their production method as the organic one, though the method does not fulfill the international standard. By these reasons the figures of the production of the urban and organic agriculture is very increased in Cuba and still is informed with idealization by the foreign visitors who reports with their good will desire.

<目次>

- I. はじめに
- II. キューバにおける先行研究
- III. キューバ農業構造の全体構造
- IV. 都市農業とはなにか
- V. 有機農業とはなにか
- VI. キューバ農業の今後の課題

## I. はじめに

数年前から日本において、キューバの都市農業・有機農業、特に有機農業が注目を浴びている。その火付け役となったのは、なんとといっても吉田太郎氏の2冊の著作、『200万都市が有機野菜で自給できるわけ—都市農業大国キューバ・レポート—』（築地書館、2002年）、『有機農業が国を変えた—小さなキューバの大きな実験—』（コモンズ、2002年）であろう<sup>1</sup>。吉田氏の著作は、90年代に経済危機から農業生産が激減したキューバが、有機農業の全面的な推進で食料危機を乗り切ったというもので、都市農業・有機農業と取り組むキューバ市民の姿を詳細かつ情熱的にレポートしている労作である。

しかし、吉田氏の意欲的な調査、パイオニア的役割は高く評価されるが、その中にはキューバの現状を主観的に美化して、必ずしも正確に現状を反映していない箇所が少なからず看取される。その他の論者の主張も概ね同様で、キューバ経済、農業全体の歴史と構造の中での評価とはなっていない。

吉田氏をはじめとして、キューバの有機農業を高く評価する人々は、「220万人を越す都市が有機農業で野菜を完全自給することに成功し、食糧危機を救った」、「キューバは文字通り『有機農業大国』『環境保全型農業先進国』と呼べる」、「国をあげて有機農業による自給に転換したキューバの有機農業は、21世紀のモデルである」、「現在キューバでは130万<sup>2</sup>の膨大な面積が完全無農薬・無化学肥料の有機農法で営まれている」と、キューバの都市農業・有機農業を絶賛している。これらの人々は、ほとんどが環境問題、健康な食の問題、キューバの社会主義への期待をもっている人々であり、キューバ農業の現状を善意と期待で見ていることは評価されてよいだろう。しかし、研究は、いわゆる鼻疽の引き倒しになってはならないと筆者は考えている。

キューバを頻繁に実態調査で訪れているフロリダ大学のアルバレス教授は、革命勝利以来のキューバ農業を全面的に分析した著書で、問題を次のように的確に指摘している。

「キューバが導入しつつある代替・都市農業モデルは、外国人研究者を感動させ、存在しない状況を描写するほどにまで至っている。2001年6月27日BBCのグREG・モースバックが、ハバナから報道したニュースを読んで、私は当惑した。そこには、『果物と野菜の生産が年間250%成長しており、有機農業のおかげでキューバは確実に最悪の食料供給問題を克服しつつある』と結んでいたのである<sup>2</sup>」。

さらに同教授は、キューバ側にも問題があることを述べている。

「有機農業に関し、キューバ側に正確な数字がなく<sup>3</sup>、有機農業の技術は導入の過程にあり、短期間の調査団の訪問では、その技術をすべて観察することもできず、その技術の有効性を実証的に検証するのは難しい<sup>4</sup>」。

キューバ農業問題の第一人者、ハバナ大学付属キューバ経済研究所のアルマンド・ノバ

教授も、しばしば発表されている都市農業、有機農業の数字の正確性について疑問を提起している。ノバ教授は、次のように厳しく指摘する。

「野菜の生産が年産 400 万トンという数字は信用できない。多くの数字がダブって報告されたり、膨らまされたりしている。さらに生産された場所には秤がないところが少なくない。したがって、この数字は、全国統計局 (ONE) によって認められていない<sup>5</sup>」。

小論は、現在のキューバの都市農業・有機農業が、いかに発生し、推進されるようになったか、都市農業・有機農業はキューバでどのように規定されているのか、キューバ経済・農業全体の中ではどのような位置を占めるのか、国民の食生活にどの程度貢献しているのか、本誌掲載のカステヨン論文「キューバにおける有機農業—前進と課題—」を補足して論じたいと思う<sup>6</sup>。90 年代以降のキューバ農業の変容は、筆者の関心事であるが、別稿を期したい。

## II. キューバにおける先行研究

それでは、キューバにおいて、都市農業・有機農業はどのように論じられてきたのであろうか。キューバの有機農業について先駆的に論じたものとしては、Peter Rosset and Medea Benjamin ed., *The Greening of the Revolution: Cuba's experiment with organic agriculture*, Ocean Press, Melbourne, 1994 があるが、これはオーストラリアの出版社オーシャン・プレスから出版されたものであり、一般にキューバでは外貨でしか購入できず、入手は限られており、キューバ国内ではさほど注目されなかった。翌年、クォーターリー雑誌「有機農業」(*Agricultura Orgánica*)が情報誌として刊行されるが、発行部数も限られており、一般の経済研究者の間ではあまり問題とされなかった。したがって、90 年代及び 2000 年代初頭のキューバの経済危機・情勢をキューバ人研究者が分析したものとして、次の諸研究があるが、いずれもキューバの都市農業・有機農業について論稿は見られない。

90 年代の経済困難時である「非常時」のキューバについて、キューバ経済構造、各産業の実態をキューバ側の協力を得て、詳細に分析した大著である Comisión Económica para América Latina y el Caribe (CEPAL), *La Economía Cubana: Reformas estructurales y desempeña en los noventa*, Fondo de Cultura Económica, México, 1997 においても、また 90 年代のキューバ経済全般の実態をキューバ人研究者が全般的に扱った José Bell Lara ed., *Cuba in the 1990s*, Editorial José Martí, La Habana, 1999 及び Manuel Monereo, Miguel Riera, Juan Valdés ed., *Cuba Contruyendo futuro*, El Viejo Topo, España, 2000 においても、都市農業・有機農業についての記述はまったくない。

さらに、キューバと米国のキューバ研究者のキューバ問題に関する共同執筆の論文集、*Cuban Studies No.20-35* の 1990 年版から 2004 年版 10 冊にも、都市農業、有機農業に関する論文は一本も掲載されていないし、米国の主要キューバ研究者を網羅した論文集、*Cuban Communism* でも 90 年代の Irving Louis Horowitz ed., *Cuban Communism, Seventh edition*, Transaction Publishers, New Brunswick, 1991 から、2000 年代の Irving Louis Horowitz and Jaime Suchlicki ed., *Cuban Communism, 1959-2003, 11<sup>th</sup> edition*, Transaction Publishers, New Brunswick, 2003 までの諸版にも都市農業、有機農業に関する論文は見当たらない (AA 研究誌論文にはない。のちほど追加)。

また、90 年代のキューバ農業の現状を詳細に分析した Hans-Jurgen Burchardt ed., *La*

*Última Reforma Agraria del Siglo: La agricultura cubana entre el cambio y el estancamiento*, Nueva Sociedad, Caracas, 2000 及び Alfredo González, Renato Aguilar, Pablo Fernández, Anicia García, Jorge Dresdner y Tatiana Tristá, *Cuba: El sector agropecuario y las políticas agrícolas ante los nuevos retos*, Instituto Nacional de Investigaciones Económicas, La Habana, 2002 においても都市農業・有機農業については触れられていない。

今世紀に入って出版された Alfonso Casanovas ed., *Estructura Económica de Cuba Tomo 1 y 2*, Editorial Félix Varela, La Habana, 2002 と Omar Everlenny Pérez Villanueva ed., *Cuba: Reflexiones sobre su economía*, Universidad de La Habana, La Habana, 2002 は、90年代のキューバの経済危機とそれへの対応を各キューバ人専門家が論述したものであるが、ここでも都市農業・有機農業についての論稿は見られない。

キューバの都市農業・有機農業について、学術研究としてキューバ人研究者の論文が見られるようになったのは、María Caridad Cruz y Roberto Sánchez Medina, *Agricultura y Ciudad: Una clave para la sustentabilidad*, Fundación Antonio Nuñez Jiménez de la Naturaleza y el Hombre, La Habana, 2001 が最初である。しかし、この研究は、主としてハバナ市を対象としたものである。続いて、数名のキューバ人研究者が外国人研究者とともに執筆した Fernando Funes, Luis García, Martin Bourque, Nilda Pérez, and Peter Rosset ed., *Sustainable Agriculture and Resistance: Transforming Food Production in Cuba*, Food First Books, Oakland, 2002 が出版されたが、アメリカでの出版であり、キューバでは出版されたものではなく、キューバ人研究者の間にはあまり普及してはいない。

この問題を、キューバ全体の経済、農業問題として論じ、キューバで出版されたのは、Omar Everlenny Pérez Villanueva ed., *Reflexiones sobre economía cubana*, Editorial de Ciencias Sociales, La Habana, 2004, pp.367-384 に収録された、カステヨン論文「キューバにおける有機農業—前進と課題—」”La agricultura orgánica en Cuba: Avances y Retos” が、筆者が見る限り最初である。今回翻訳したのは、この論文を新しいデータを使って加筆・修正したもの（未刊）である。

その後、キューバ人研究者の論文も見られるようになった。Elena Alvarez y Jorge Máttar coord. *Política social y reformas estructurales: Cuba a principios del siglo XXI*, CEPAL, México, 2004, pp.129-152 では、食料問題との関連で都市農業が論じられ、アメリカ人研究者とキューバ人研究者が共同でキューバ経済の現状を分析した Jorge I. Domínguez, Omar Everlenny Pérez Villanueva and Lorena Barberia ed., *The Cuban Economy at the Start of the Twenty-First Century*, Harvard University Press, Cambridge, 2004, pp.245-295 でも食料問題との関連で論じられている。Beatriz Díaz González, “The Transition to Sustainable Agriculture and Rural Development in Cuba” in José Bell Lara y Richard A. Dello Bueno, *Cuba in the 21<sup>st</sup> Century: Realities and Perspectives*, Editorial José Martí, La Habana, 2005, pp.156-161 では、キューバ農業が、1990年代の非常時の困難な中で、持続可能な農業に転換を迫られた過程を分析している。しかし、都市農業・有機農業という観点から論じたものではない。

こうした研究の現状から、小論でキューバの都市農業・有機農業の歴史的位相を論じるのも、まったく意味がないことではないと考える次第である。

### III. キューバ農業構造の全体構造

#### 1) 依然として不足する食料

現実のキューバ農業は、都市農業・有機農業生産も含めて、2005年度、国民に食料をカロリー計算で58%、たんぱく質で62%、主食の米で34.3%供給しているにすぎない<sup>7</sup>。国産の食料不足を補うために、05年、06年と、食料の輸入に約17億<sup>ドル</sup>程度、全輸入額の20%以上を費やしているのが実情である(表1)。また、キューバでは食料は配給制となっており、筆者の調査では、配給を通じて一人当たり月間食料消費量の40-60%が、政府の補助金を受けて、市価の10~5分の1程度の価格で(1ヶ月の配給食糧合計金額は一人当たり26-38ペソ程度)配給されている<sup>8</sup>。国民は、この毎月の消費食料の不足分60-40%<sup>9</sup>は、自由市場、闇市場で買わなければならない。マガリス・カルボ経済・企画省副大臣によれば、この配給食糧品の84%が輸入食料で、そのため年間約10億<sup>ドル</sup>使用されているということである<sup>10</sup>。

したがって、キューバは、有機農業も行われているが、まずは食料の増産が最優先の課題となっているのである。本年6月、全国基礎行政区長会議において、カルロス・ラヘ閣僚評議会書記は、食料問題における量と価格の問題を率直に述べた。

「食料生産とその流通販売が検討された。生産は不十分であり、流通販売には欠陥がある。これは農業の問題だけでなく、議会の問題でもある。皆さんは、生産に関する問題をよく認識し、もっと多くの食料が市場に到着するように、また一層国民が買える価格となるように提案しなければならない<sup>11</sup>」。

このように食料生産が全国的に不足しており、そのため、優先されている生産目標を達成するため、都市農業・有機農業においても化学農薬を別なところから調達してきて使用するものもいるという<sup>12</sup>。したがって、「キューバの都市農業はすべて有機農業」という考え方は、たとえ少なからずのキューバ人ジャーナリスト、都市農業関係者が述べているとしても、そのまま信じるわけにはいかない。

#### 2) GDPに占める農業生産の歴史的位

フィデル・カストロが指導する「7・26運動」が反バチスタ独裁闘争を展開した1950年代後半のキューバの経済構造は、米国資本と砂糖依存のモノカルチャ経済であった。輸出の70%以上は砂糖輸出であり、農業国でありながら、食料の70%を輸入しなければならなかった<sup>13</sup>、輸出の75~80%は砂糖輸出であった。GNPの25~30%は砂糖部門で占められていた。まさに19世紀末にキューバ独立の使徒ホセ・マルティが、「人民は、単一の作物に生存を託す日には、自殺することになる」と警告した砂糖への全面的依存構造が継続していたのである<sup>14</sup>。

しかし、7・26運動の指導者たちは、問題を見做していたわけではなく、7・26運動の綱領的文書、「歴史は私を無罪に宣告するであろう」の中で、フィデル・カストロはキューバ経済の多角化の必要性を強調している<sup>15</sup>。また、カストロは、農業の多角化も主張していた<sup>16</sup>、1959年5月の第一次農業改革法も経済の工業化・多角化の必要性を訴えていた<sup>17</sup>。

しかし、生まれたばかりのキューバ革命は、経済・政治の民主化を進める中でアメリカ帝国主義の干渉を受け、ソ連圏との関係を深めることで革命を守らなければならなかった。

1962年10月のキューバ・ミサイル危機の後、キューバは、ソ連との経済関係を一層強め、1965年、ソ連と砂糖協定を結び、1970年から毎年500万トンの砂糖をソ連に輸出することとなった。そのためキューバは、1970年に砂糖を1,000万トン生産する目標を決めた<sup>18</sup>。キューバ経済は、ソ連経済圏に強く組み込まれ、80年代末には貿易の70%をソ連、15%を東欧諸国が占めた。ソ連圏との貿易の優先品目である砂糖、柑橘類、また国民への牛乳の供給のための牧草と主食の米の栽培には耕地面積が増やされたが、野菜・根菜類の栽培面積は増やされなかった。その結果キューバ国民一人当たりの国内消費向け耕地面積は0.14ヘクタールでアメリカの4分の1、欧州連合の2分の1となった<sup>19</sup>。

こうして80年代末のキューバ農業の特徴は、次のようなものとなっていた。

- 砂糖栽培面積が農地の45%を占め、砂糖生産が農業生産の70%程度を占める過度に集中した農業。砂糖モノカルチャー構造は克服されなかった。
- 農業生産が、GDPの15%を占め、工業化は未達成であった(表1)。
- 砂糖栽培、米作、かんきつ類栽培は、高度に機械化された大規模農法で行われた。
- 1ヘクタール当たりの投下化学農薬は、6.10kg、投下化学肥料は、217.7kgであった。
- 農地の75%は国営農場で、面積は平均1万ヘクタール以上、労働者は千数百人という大規模経営で、生産性はかなり低いものであった(表3参照)<sup>20</sup>。

そうした結果、キューバは、キューバ経済の黄金時代といわれる80年代においても食料自給率は55%以下で、毎年、食料を9億ドル程度輸入しなければならなかった<sup>21</sup>。

こうした砂糖依存、ソ連依存の中央指令型経済構造のもとで、国民の所得と分配における平等性を重視しながら、医療、教育、文化、スポーツの分野に重点をおいて、経済政策が展開された。この期間、キューバ経済は、1971-80年間には平均5.2パーセント、1981-85年間には平均6.7%の経済成長を達成したが、80年代末には経済は停滞し、こうしたキューバ経済モデルは、より一層の経済発展のためにはすでに桎梏となっていた。

まさに、そうした時期に、東欧のいわゆる「社会主義国」が崩壊し、ソ連経済の混迷が深まった。1990年、石油を初めとするソ連・東欧からの輸入物資が激減した結果、キューバ政府は、「平和時の非常時」を宣言し、食料の配給品目を再び拡大して分配の平等性を強化しつつ、各種の緊縮政策を打ち出した。実は、「平和時の非常時」は、キューバ国内の社会・経済の総動員体制の強化を意味するひとつの政治的画期であるとともに、従来の中央指令型計画経済モデルの終焉を意味するひとつの経済的画期でもあった。外貨収入の激減から、輸入資材が激減し(94年度は89年度の5分の1)、貿易依存度の高いキューバ経済に深刻な後退を招き、90年から93年の4年間で経済は40.1%後退した(表1)。92年には旧ソ連の諸共和国との貿易は往復8億3,000万ドル(全貿易の7%)にまで激減した。石油、製糖工場の機械、砂糖きび刈取りコンバイン、トラック、農業用トラクター、化学肥料、殺虫剤、除草剤などの化学農薬、農業機械及び資材、化成品、航空機、バスなどの輸入に重大な困難が生じた。交通難、食糧難、日常必需品の不足で国民生活は極めて厳しいものとなった。94年には大量出国事件が再発した。

### 3) 経済困難に対する経済改革と食料の増産

「平和時の非常時」において、当面の外貨収入の増大をもたらす観光の推進、外国投資の誘致、外貨所持の自由化といった政策では経済危機の本格的な対策としては不十分であり、政府は、94年から生産力を解放して、生産を増大するため、市場機能を導入した種々

の経済改革政策を開始した。海外資本の積極的な誘致、各種自営業の拡大、国営農場の協同組合生産基礎組織（UBPC）への改編、農産物の自由市場の創設、工業製品の自由市場の創設、飲食自営業の承認、銀行制度改革、税制改革、企業改革などが推進された。しかし、カストロ議長は、急進的な経済開放から引き起こされるかもしれない経済混乱に乗じて米国の介入が予想されるとして、市場機能の導入には極めて慎重な態度を取っている。製造業、小売業において限られて業種で個人営業は認められているものの、小規模私企業は認められていない。

こうした経済危機の中で、食糧生産が、経済活動の第一の目標に置かれた。危機の5年間で国民の食料摂取は、30%減少した。政府は、乏しい外貨の中で、食料輸入を最優先におくとともに、食料の増産政策を進めた。激減した農業機械、石油燃料、化学肥料、化学農薬、化学除草剤を補うために、国内で利用できるものは何でも代替資材とされた。大規模農場は解体されて、協同組合生産基礎組織（UBPC）に改編されるとともに、農場の規模を10分の1程度にダウンサイズし<sup>22</sup>、牛耕が行われ、バイオ肥料、バイオ農薬が使用されるようになった。このように、キューバにおいて、有機農業は、食料生産を維持するという歴史的事情から追求することを余儀なくされた農法の一手段であり、目的ではない。キューバの有機農業を論じるときには、この観点を失うと有機農業の現実を過度に美化することになりかねない。

#### 4) 変容した産業構造・農業構造

キューバ経済は、もはやかつてのような砂糖モノカルチャー構造ではない。それどころか、GDPの70%以上をサービス業が占め、製造業は14%を、農業は4%強を占めるに過ぎない<sup>23</sup>。産業構造の大転換によって砂糖生産は、80年代に見られた年産600-800万トン大きく下回るようになり、キューバ政府は、2002年砂糖の国際価格を下回ってしか生産できない製糖工場を閉鎖して、栽培面積・生産能力を半減した。そのため、近年では砂糖生産は、年産100-150万トンに過ぎない。しかも砂糖を年間数10万トン輸入しているのである。

また、農業生産全体も大きく収縮した（表1）。キューバ全体のGDP、391億<sup>ドル</sup><sup>24</sup>のわずか4.3%に貢献する農業に、労働人口の20.2%、95万6,000人が従事している。国土総面積1,098万<sup>ヘクタール</sup>（10万9,800平方キロ）のうちの659万<sup>ヘクタール</sup>（60%）が農用地で、農地（耕地）として322万<sup>ヘクタール</sup>（国土の29%、農用地の49%）が利用されている。1989年以降、食料危機が問題となっている中で、栽培農地面積が27%減少しているのは、2002年に砂糖キビ栽培面積を半減したためである。

こうした栽培農地面積と農業従事者の中で、40万人近くが、6万~7万<sup>ヘクタール</sup><sup>25</sup>（栽培農地面積の20%）で都市農業を営み、野菜・根菜を120-140万<sup>トン</sup><sup>26</sup>（同栽培の25%）生産している。しかし、この都市農業のすべてが有機農業ではない。キューバ政府が、有機農業の生産高について発表した数字はない。都市農業の生産高については、グランマ紙などで報道されるが、全国統計庁（ONE）の統計には出てこない。

## IV. 都市農業とはなにか

### 1) 都市農業の自然発生的発生

90年から始まった非常時の中で、それぞれの市民が、食料不足を補うために自発的に家

庭菜園で野菜を栽培し始めたが、その栽培と余剰産物の販売が合法的に認められたのは、91年の第4回キューバ共産党大会においてであった<sup>27</sup>。しかし、第4回キューバ共産党大会でも97年の第5回キューバ共産党大会の経済決議でも、都市農業、有機農業という言葉は、一言も述べられていない。第4回大会で「生物学的制御・殺虫剤・生物学的肥料の開発」がいわれており、第5回大会で「生物学的農薬、生物学的肥料の開発」がいわれている程度である。都市農業の本格的推進は、1995年まで待たなければならなかった<sup>28</sup>。さらに都市農業が、組織的に推進されるのは、1997年からである<sup>29</sup>。

非常時におけるキューバ農業の課題は、次のようなものであった。

- 1) まず、至上課題として、激減した食料生産（5年間で68%減）を回復し、国民の需要に応える（表1）。
- 2) 食料生産に利用できる生産要素（都市の遊閑地も含め）はいかなるものでも利用する。
- 3) 外貨収入の減少から、輸入資材の利用をできるだけ減らす。国産の代替資材を利用する。そのため減化学農薬（輸入）、減化学肥料（輸入）、農業機械の減少に対して人力・畜力による補填、輸送距離の短縮（ガソリン、輸送手段輸入）、倉庫を使用しない（節電）、直接販売などにより、生産・流通・販売コストを削減する。
- 4) 大規模機械化農業が実施できなくなったことから、人力・畜力農業を導入するために、大規模農場を小規模化する。
- 5) 資材不足による操業停止となった工場、産業構造の調整により新に生み出された失業者を都市農業の振興によって雇用を創造し吸収する。
- 6) 増加した都市農業による農薬汚染を防ぐために、一定の都市の内部の野菜栽培には原則として化学農薬の使用を禁止する。

といったものであった。こうした理由から、都市農業が、一躍脚光を浴びることとなったのである。

## 2) 都市農業の規定

それでは、一体、キューバでいわれる都市農業とはどのようなものであろうか。全国都市農業グループ責任者のアドルフォ・ロドリゲスによれば、次のような地域で行われる農業が都市農業と規定されている<sup>30</sup>。

- ① ハバナ首都圏、及びハバナ県全体。
- ② 12県の県都の中心から10キロメートル周辺の地域。
- ③ 169の基礎行政区（Municipal）の中心から5キロメートル周辺の地域。
- ④ 1000人以上の村落の中心から2キロメートル周辺の地域。
- ⑤ 住宅15戸以上の村落で住宅に隣接して自給用に栽培される土地。

この内、注目されるのは、ハバナ県（面積5,732平方キロ<sup>31</sup>でほぼ三重県に相当し、人口729,000人で島根県に相当する）全体が、都市農業区域に指定されていることである。ハバナ県を旅行すると分かるが、ハバナ市の郊外に出ると、一面の平野であり、そこで行われている農業は、とても都市農業の概念と結びつかない。また県都の市街地は普通5キロメートル以内であり、それを超えると農村地帯となる。基礎行政区にしても2-3キロメートル以外は農村地帯である。キューバの場合、かなりの地域が、本来の都市農業の概念から離れた、一般農業区域も含むものであることを理解しておく必要がある。つまり、都市農業の生産量として発表される数字の中には、本来の都市農業とはかけ離れた自然条件の中



で生産されているものも、少なからず含まれているのである。

### 3) 都市農業の栽培形態

こうした都市農業は、次のような栽培方法で行われている。

1. **オルガノポニコ(Organopónico)**: 最も新しい方法で、一般に耕作が不可能と考えられる不毛の土地に、盛り土をして有機肥料を施肥した土壌が失われないように横幅 1.5メートル程度の長方形の区画をコンクリートブロックなどで囲み、その中の菜壇で集約的に野菜を栽培する。平均 0.3 ㊦。国営農場、協同組合生産基礎組織 (UBPC) によって運営されるもの、企業・官庁に属するものなどある。野菜は、学校、病院、労働者の給食に供給される。2003年までに全国で4,035のオルガニポニコが存在している<sup>32</sup>。しかし、後述するように、このオルガノポニコのすべてで厳密な意味での有機農業が行われているわけではない。
2. **集約菜園**: 国営農場、協同組合生産基礎組織農場 (UBPC)、農業生産協同組合農場 (CPA) で行われる。平均 0.55 ㊦。耕作可能な土地に、ブロックなどを使用して土壌を保護しないで、有機資材を盛り土した菜壇に投入して野菜を栽培する。2003年には全国で8,563の集約菜園が存在している<sup>33</sup>。
3. **小土地菜園・家庭菜園**: 主として個人菜園。最も一般的に行われている方法。90年代の非常時に自然発生的に発生したもの。一般には都市の郊外の建物や、道路、住宅の間にある狭小の可耕地や、庭園で野菜を栽培する。家庭菜園は平均 0.03 ㊦。小土地菜園は平均 0.2 ㊦。家族や地域住民に食料を供給する。03年現在、全国で家庭菜園は、385,559箇所あり 12,774 ㊦で栽培されており、小土地菜園は、139,960箇所あり 30,975 ㊦で栽培されている<sup>34</sup>。
4. **工場・企業付属菜園**: 工場や各種企業、官庁の職員食堂での給食用に野菜を栽培する。自家消費農場ともいわれている。現在ハバナ市だけでも 300 の農場があり、5,368 ㊦で野菜、根菜、豆、果樹を栽培し、畜産も行っている。余剰農産物は地域住民にも直接販売される。
5. **郊外農場**: 自営農や国営農場で行われている。都市の郊外や外環にあるが、都市農業の性格をもっている。2-15 ㊦の規模で野菜、花、果樹など様々な農産物を栽培する。酪農も行う。近隣住民の残債物を利用し、化学農薬は最小限の使用に留められている<sup>35</sup>。販売も近隣住民にも販売する。ハバナ市だけでも 2,000 の自営農の郊外農場と 285 の国営郊外農場がある。栽培面積は、両方で 7,718 ㊦。
6. **ハウス栽培・セミ・ハウス栽培**: 最近、国営農場で最近始められた栽培方法。天井と周りをビニールなどで覆い、栽培野菜を保護する。化学肥料・化学農薬を使用している<sup>36</sup>。セミ・ハウス栽培は、ビニールで天井のみを覆う。化学農薬を使用しない。
7. **家屋菜園**: 個人の家庭でバルコニー、屋上などで何らかの容器を利用して、住宅の中で野菜を栽培する。

一般にはキューバの都市農業は、すべて有機農業であるといわれる<sup>37</sup>。しかし、以上でわかるように都市農業は、すべてが有機農業ではない。

## V. 有機農業とはなにか

### 1) 有機農業の規定

キューバにおける有機農業は、都市農業を進める形で生まれた農法であるが、キューバではどのようなものを有機農業と規定しているのでしょうか。

現在、日本でいわれている有機農業の4条件は、次の通りである<sup>38</sup>。

- ① 化学合成農薬（除草剤、除虫剤、殺菌剤）を使用しない。
- ② 化学肥料を使用しない。
- ③ 化学合成土壌改良資材を使用しない。
- ④ この条件を3年間維持する。

さらに、欧米では、有機農場と非有機農場との間隔は6メートル以上空けなければならないとされている。では、キューバにおいてはどうか。前述のアドルフォ・ロドリゲス氏によると、3年間化学肥料、化学農薬無使用の基準は日本と同じであるが、キューバ国内における法律はなく義務ではない、しかし、有機農業としては化学農薬、化学肥料を使用しないことを遵守するようにしているとのことである<sup>39</sup>。

## 2) 有機農業の実態

筆者がインタビューした、ハバナ市ミラマール地区にある農場（オルガノポニコ発祥の地）の責任者、国家資源再生庁（INRE）生産・サービス局長、トニー・アントニオ・モリーナ氏の説明では、有機農業といわれるオルガノポニコの生産物の4条件は、次の通りである。

- ① 有機資材の使用。
- ② 有機（バイオ）肥料の使用。
- ③ 有機（バイオ）農薬の使用。
- ④ 認定水の使用。

しかし、現実の作業では：

- ①化学合成土壌改良資材は使用していない。
- ②化学肥料は7年間無使用。
- ③化学除虫剤も7年間無使用。

しかし、③の化学農薬に関して、「殺菌剤は、病気が発生した際、生産を維持することが目的であるため化学合成殺菌剤を使用する、したがってクリアしていない。また④の認定水は6ヶ月前から行っている」とのことであった。これでは、日本などと同じ条件をクリアしたとは言えず、有機農産物とはいえない。モリーナ氏によれば、日本の4条件を満たした農業は、エコロジーの農業(Agricultura ecológica)と呼び、その生産物は、エコロジー農産物(producto ecológico)と呼ばれる<sup>40</sup>。すなわち、一般にキューバでいわれている有機農業は、日本や欧米の基準での有機農業ではないといえよう。

実際、依然として、キューバには、有機農業に関する明確な規定もなく、有機農産物認定機関も存在していない。したがって、有機農業を論じる人によって、厳密に欧米並みの有機農業の基準にもとづいて論じていない場合が少なくないことに注意する必要がある。

## 3) 有機農業の規模

現在、有機農業の政府の統計もないので、数値化が難しいが、有機農薬は、現在、全農地500万<sup>2</sup>のうち100万<sup>2</sup>近くで適用されているといわれている<sup>41</sup>。これから類推すると、大雑把に言えば、認定されてはいないが、キューバ農業の5分の1程度において、一般的に有機農業が行われているといえるかもしれない。しかし、繰り返すが、これはあくまで、

意識的あるいは無意識的に有機農法が行われているということで、有機農業の 4 条件が満たされた有機農業が、5 分の 1 の面積で行われ、その生産物が有機農産物であることを必ずしも意味しない。生産者にも有機農法を目的意識的に行っているという意識は、ほとんどの場合ないといってよい。正確に認定された有機農産物は、本誌掲載のサンティアゴ・ロドリゲス・カステヨン論文「キューバにおける有機農業—前進と課題—」の表 1 にあるように、2004 年で合計 5,751.2 トンにしかすぎない。

## V. キューバ農業の今後の課題

### 1) 食料増産が感じられない家庭の食卓

ハバナ郊外の風景、また地方の風景を見ると、広大な平野が続いており、よもや食料の自給率が 50% 余の国とは信じられない。主食の米の自給、食料自給率の向上は、常に提起された課題であったが、革命勝利後 48 年にしてその輸入依存構造は克服されていない（表 1）。都市農業の推進で野菜・根菜の生産が増大しているが、国民の需要をまだ十分満足させるものではない。むしろ、供給の不十分さを反映して、近年、農産物の自由市場において、野菜、根菜の価格が恒常的に上がっている<sup>42</sup>。

普通、国民の食事は、米を主食とし、パンも欠かせない。米は、自給率 34.3% で、パンの原料小麦は 100% 輸入である。また、蛋白源として、牛のひき肉、鳥肉、豚肉、鶏卵、豆類が消費されているが、〈表 2〉に見られるように、これらの国内生産は、いずれも微増、ないしは停滞、あるいは減少しており、とても国民の食料事情が改善されたとはいえない。さらに野菜・根菜としては、ジャガイモ、サトイモ、料理用バナナが多く消費される。しかし、これらの生産もサトイモを除き、横ばい、ないしは減少である。すなわち、国民は、都市農業による野菜が年間 400 万トン生産されるようになり（この数字には疑問があるが）、その点での改善は見られるものの、一般に生活実感としては、毎日の食卓においては食料の供給が大きく改善されたとは感じない。

### 2) 赤字の農産物貿易収支

かつては 1989 年には 43 億 7,200 万ドル（その内砂糖が 39 億 5,900 万ドル、90%）の農産物を輸出して、9 億 3,300 万ドルの農産物を輸入しており、農産物貿易に限り、34 億 3,900 万ドルの黒字であった<sup>43</sup>。しかし、この貿易収支だけでなく、輸出農産物の栽培のために資材を 14 億ドル輸入していたので、純収入は、20 億 3,900 万ドルであった。ともかくは、多くの食料を輸入はするが、食糧の輸出によって外貨は補填され、外貨の面からは問題がなかった。

しかし、2004 年には、4 億 5,900 万ドルの輸出で、10 億 3,300 万ドルの輸入となっており、5 億 7,400 万ドルの赤字であった。さらに輸出農産物の栽培のために資材は、数億ドル程度と推測されるので、完全な赤字輸出となっている。また、2005 年には農産物の輸入が、海外の食料価格の値上がりなどで 18 億ドルに急増したので、農産物の貿易収支は、13 億ドル程度赤字となったことと推計される。キューバ農業は、現在、深刻な危機に陥っているといっても過言ではない。近年、医療サービス輸出の増大（外貨収入の 70% 以上<sup>44</sup>）で、外貨ポジションが好転しているので<sup>45</sup>、輸入総額の 20% 以上の食料輸入も可能である。しかし、均衡の取れた国民経済、食料安全保障の観点からすれば、こうした食料の高度な外国依存は望ましいことではない。

### 3) 歴史的課題、農業生産の不振の克服

キューバにおける農業生産の不振は、歴史的な原因による。なによりも農村人口が、革命前の1953年の人口全体の43%<sup>46</sup>から2005年には24.4%に<sup>47</sup>減少している。さらに、農業就業人口も1953年には就業人口の43%<sup>48</sup>であったが、農業の機械化があったにせよ、2005年には20%余と半分以下に減少している。この農業就業人口の減少は、教育水準の上昇により、青年が厳しい農作業に従事しなくなったといわれているが、さらには、国の集荷公団(ACOPIO)による農産物の買付価格が低く、国営農場であれ、自営農民であれ、厳しい労働に報いた収入とはなっていないこともある。また、農村の文化的、経済的生活条件が、都市部ほど恵まれていないことも指摘されている。栽培品目の自由に関して行政的な規制が強く、販売先もACOPIOに生産物の大部分を義務付けられている。さらに国に農産物の65%を供給している協同組合、農民への買付農産物代の支払いが著しく遅れていることも重大な問題として指摘されている<sup>49</sup>。つまりは、農業経営にさほど魅力がないといわれている。キューバは、こうした種々の歴史的困難を克服して、農業生産を増大しなくてはならない。こうした長い、困難な過程の中に、キューバの都市農業、有機農業の課題も位置づけられるのである。

〈表1〉1989—2005年のキューバ農業生産の変遷

項目	1989	1995	2000	2005
GDP (100万ペソ)	26,652	21,737	28,206	39,172
農牧畜生産 (100万ペソ)	4,153	1,312	2,017	1,700
GDPにおける農牧畜生産%	15.6	6.0	7.2	4.3
栽培農地面積 (1,000ヘクタール)	4,410.4	4,410.4	3,599.6	3,227.7
農業従事者 (林業・漁業含む千人)	690.3	835.0	1,187.6	956.3
全労働人口中の農業従事者 (%)	19.6	23.3	27.1	20.2
農産物合計 (砂糖含む、トン) *	11,075,437	4,042,614	9,461,884	9,646,785
野菜・根菜類生産 (トン)	1,291,435	1,426,465	2,963,165	6,228,800
米生産 (トン)	536,381	228,846	552,800	367,600
砂糖生産 (トン) **	7,579,000	3,360,000	3,640,000	1,160,000
都市農業生産 (トン)	-----	40,000	1,680,000	4,110,000
食料輸入額 (1,000ドル) ***	925,349	610,890	671,801	1,804,893
輸入総額に占める食料輸入額 (%)	11.4	21.2	14.0	22.6
一日一人当たりカロリー摂取 KC****	2,845	1,993	2,570	3,286
化学除草剤・農薬 (金額1,000ペソ)	80,807	64,611	42,520	35,916
除草剤 (トン)	17,151	12,987	5,853	4,613
農薬 (トン)	9,740	4,124	3,213	2,558
化学肥料 (金額1,000ペソ)	157,752	105,993	46,068	41,700
尿素 (トン)	351,000	143,000	110,279	33,985
過リン酸石灰 (トン)	337,000	75,000	47,059	11,474
硫安 (トン)	272,000	36,000	17,185	8,365

出典：Oficina Nacional de Estadísticas, *Anuario Estadístico de Cuba 1989, 1998, 2001*,

2005.

\*動物生産は含まない。

\*\*IPS, *Resumen Económico Anual* では 130 万トンと報告されている。

\*\*\*2005 年 : *La Jornada*, Abril 20, 2006

\*\*\*\* Angela Ferriol Muruaga/Alfredo González Gutiérrez/Didio Quintana Mendoza/Victoria Pérez Izquierdo, *Cuba: Crisis Ajuste y Situación Social (1990-1996)*, Editorial de Ciencias Sociales, La Habana, 1998, p.86; Viviana Togores and Anicia García, “Consumption, Markets, and Monetary Duality in Cuba” in Jorge I. Domínguez, Omar Everleny Pérez Villanueva and Lorena Barberia ed., *The Cuban Economy at the Start of the Twenty-First Century*, Harvard University Press, Cambridge, 2004, p.261; Elena Alvarez y Jorge Máttar coord. *Política social y reformas estructurales: Cuba a principios del siglo XXI*, CEPAL, México, 2004, p.141; 2005 年の数字はなく、2003 年の数字。世界国勢図絵 2006 年 p.477。

〈表 2〉 非常時における農業生産の減少と回復 1989-2005

農業生産 (単位トン)						
生産物	1989	1994	1995	1998	2001	2005
GDP 100 万ペソ	20,960	14,421	14,421	23,744.8	31,446.9	39,172.2
ペソ/ドル	5	45-50	20-25	20-22	27	26
GDP 成長率 %	0.7	0.6	2.5	1.2	4.2	11.8
根菜類	972,578	845,216	1,024,184	1,383,700	2,348,600	2,575,300
ジャガイモ	281,660	188,334	281,642	206,208	345,380	312,700
サトイモ	37,590	7,208	7,782	25,613	98,540	225,873
バナナ類	291,378	360,679	399,989	462,280	968,000	773,500
野菜類	610,235	322,164	402,281	846,500	2,676,500	3,653,500
米	536,381	226,095	222,846	441,600	601,000	367,600
トウモロコシ	47,103	73,623	80,990	176,600	298,900	362,500
豆類	14,605	10,771	11,474	18,490	106,300	106,200
黒豆	14,107	10,771	11,474	18,490	106,300	106,200
かんきつ類	825,655	504,991	563,359	744,500	957,100	554,600
その他果樹	218,887	89,110	112,290	253,500	683,700	819,000
牛肉	289.1	120.5	129.1	148.1	149.9	119.8
豚肉	110.4	85.6	89.5	122.3	114.9	146.5
鳥肉	142.8	55.6	60.6	72.6	70.3	37.8
羊・山羊	--	6.0	5.6	8.3	16.0	20.3
牛乳	1,131.3	622.1	608.3	655.3	620.7	332.4
鶏卵 (100 万個)	2,677.6	1,561.1	1,414.9	1,415.7	1,524.5	2,066.3

出典: CEPAL, *La Economía Cubana: Reformas estructurales y desempeño en los noventa*, Fondo de Cultura Económica, México, 1997. ONE, *Anuario Estadístico de*

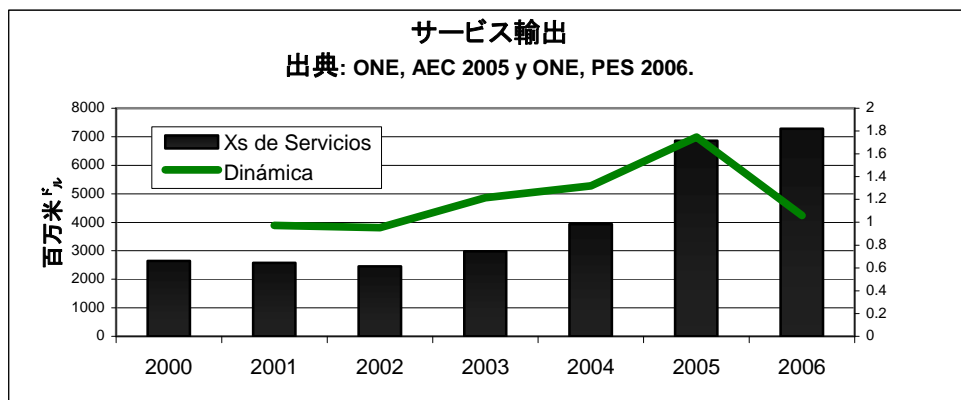
Cuba, 1989, 1998, 2005.

〈表 3〉 主要野菜の収穫率 単位：トン/ヘクタール（1948年、1989年、2003年）

年	ジャガイモ			米			トマト		
	1948/52	1989	2003	1948/52	1989	2003	1948/52	1989	2003
世界平均	11	15	16.4	1.7	3.4	3.8	13	23	26.2
欧州連合	16	32	--	2.5	6.3	--	15	53	--
東欧.	13.7	21.5	--	--	5.4	--	16	36	--
ドミニカ	--	12	18.3	1.6	4.4	6.0	14	21	25.8
キューバ	8.6	19.3	23.9	2.5	3.5	3.5	7	10	13.5

出典: Miguel Alejandro Figueras, *Aspectos Estructurales de la Economía Cubana*, Editorial de Ciencias Sociales, La Habana, 1994, p.57; Armando Nova, *La Agricultura en Cuba: Evolución y trayectoria*, Ciencias Sociales, La Habana, p.263.

〈表 4〉 サービス輸出の伸長



出典: Juan Triana Cordoví, *La economía cubana: desempeño en el año 2006*, La Habana, 2007, inédito.

〈表 5〉 所有形態別土地面積 単位1000ヘクタール

所有形態	1992	1997
国営部門		
製糖工業コンビナート	2,025.4	236.3
農牧畜企業	4,052.7	1,981.7
青年労働部隊農場	--	195.4
内務省農場	--	82.1
林業農場	2,119.4	2,268.8
地方議会管理農場	788.3	446.5
その他国営	201.3	679.3
国営部門合計	9,187.1	5,890.1
非国営部門		

協同組合生産基礎組織(UBPC)	--	3,116.8
農業生産協同組合(CPA)	772.9	722.9
信用サービス協同組合(CCS)	850	897.7
独立農民	256.3	262.5
その他非国営	--	82.2
非国営地合計	1,879.2	5,082.1
総合計	11,060.3	10,972.2

出典：各種資料から筆者作成。

## 参考文献

### 邦語文献

- オマール・エベルレニ・ビジャヌエバ、新藤通弘訳「21世紀におけるキューバ経済—前進と挑戦」『アジア・アフリカ研究』2004年第376号。
- 金子美登、尾瀬あきら、吉田太郎『21世紀のモデル、キューバの有機農業』（共学舎出版企画、2000年）。
- 首都圏コープ事業連合編『有機農業大国キューバの風』（緑風出版、2002年）。
- 新藤通弘『現代キューバ経済史』（大村書店、2000年）。
- 新藤通弘「キューバ経済構造の歴史的変容」、『軍縮地球市民』No.6、2006。
- 新藤通弘「正念場を迎えたキューバ経済」、『雑誌経済』2006年9月号。
- 世界国勢図絵2006年。
- L.ヒューバーマン/P.M.スウィージー『キューバ—一つの革命の解剖—』池上幹徳訳（岩波新書、1960年）。
- フィデル・カストロ「歴史は私に無罪を宣告するであろう」、フィデル・カストロ『わがキューバ革命』池上幹徳訳（理論社、1961年）。
- 西尾道徳『有機栽培の基礎知識』（農文協、2003年）。
- 有機農業推進議員連盟「キューバ有機農業視察（2006年4月28日-5月8日）。
- 吉田太郎『200万都市が有機野菜で自給できるわけ—都市農業大国キューバ・リポート—』（築地書館、2002年）
- 吉田太郎『有機農業が国を変えた—小さなキューバの大きな実験—』（コモンズ、2002年）。
- 吉田太郎『1000万人が反グローバリズムで自給・自立できるわけ』（築地書館、2004年）。

### 外国語参考文献

#### 雑誌、新聞、通信社：

- ACTAF, *Agricultura Orgánica*, La Habana.
- *Cuba Business*, La Habana.
- *Granma*, La Habana.

- *IPS*, La Habana.
- *Juventud Rebelde*, La Habana.
- *La Jornada*, Mexico.
- *Prensa Latina*, La Habana.
- *Radio Habana Cuba*, La Habana

書籍 :

- Adolfo Rodríguez Nodals y Nelso Companioni Concepción, *Situación actual, perspectivas y retos de la Agricultura Urbana en Cuba*, INIFAT, La Habana, 2006, inédito.
- Alfonso Casanovas ed., *Estructura Económica de Cuba Tomo 1 y 2*, Editorial Félix Varela, La Habana, 2002
- Alfredo González, Renato Aguilar, Pablo Fernández, Anicia García, Jorge Dresdner y Tatiana Tristá, *Cuba: El sector agropecuario y las políticas agrícolas ante los nuevos retos*, Instituto Nacional de Investigaciones Económicas, La Habana, 2002.
- Angela Ferriol Muruaga/Alfredo González Gutiérrez/Didio Quintana Mendoza/Victoria Pérez Izquierdo, *Cuba: Crisis Ajuste y Situación Social (1990-1996)*, Editorial de Ciencias Sociales, La Habana, 1998.
- C. Anicia García Álvarez y Lic. Betsy Anaya Cruz, *Política social en Cuba*, nuevos enfoques y programas recientes, La Habana, 2006, inédito.
- Armando Nova, *La Agricultura en Cuba: Evolución y trayectoria*, Ciencias Sociales, La Habana.
- Beatriz Díaz González, “The Transition to Sustainable Agriculture and Rural Development in Cuba” in José Bell Lara y Richard A. Dello Bueno, *Cuba in the 21<sup>st</sup> Century: Realities and Perspectives*, Editorial José Martí, La Habana, 2005.
- Carlos Iglesias, *Entrevista a Adolfo Rodríguez*, 2004, La Habana, inédito.
- Comisión Económica para América Latina y el Caribe (CEPAL), *La Economía Cubana: Reformas estructurales y desempeña en los noventa*, Fondo de Cultura Económica, México, 1997.
- Elena Alvarez y Jorge Máttar coord. *Política social y reformas estructurales: Cuba a principios del siglo XXI*, CEPAL, México, 2004.
- Fernando Funes, Luis García, Martin Bourque, Nilda Pérez, and Peter Rosset ed., *Sustainable Agriculture and Resistance: Transforming Food Production in Cuba*, Food First Books, Oakland, 2002.
- Hans-Jurgen Burchardt ed., *La Última Reforma Agraria del Siglo: La agricultura cubana entre el cambio y el estancamiento*, Nueva Sociedad, Caracas, 2000.
- IPS, *Resumen Económico Anual 2001, 2005, 2006*, La Habana.
- Jorge I. Domínguez, *To Make a World Safe for Revolution: Cuba's Foreign Policy*, Harvard University Press, Cambridge, 1989.
- Jorge I. Domínguez, Omar Everleny Pérez Villanueva and Lorena Barberia ed., *The*



*Cuban Economy at the Start of the Twenty-First Century*, Harvard University Press, Cambridge, 2004.

- José Alvarez, *Cuba's Agricultural Sector*, University Press of Florida, Florida, 2004.
- José Bell Lara ed., *Cuba in the 1990s*, Editorial José Martí, La Habana, 1999.
- Manuel Monereo, Miguel Riera, Juan Valdés ed., *Cuba Contruyendo futuro*, El Viejo Topo, España, 2000.
- José Martí, "El Tratado Comercial entre Los Estados Unidos y México", en *Obras Escogidas Tomo I*, Editora Política, La Habana, 1978.
- Leo Huberman and Paul M. Sweezy, *Cuba: Anatomy of a Revolution*, Monthly Review Press, New York, 1961.
- Miguel Alejandro Figueras, *Aspectos Estructurales de la Economía Cubana*, Editorial de Ciencias Sociales, La Habana, 1994.
- Nelso Companioni, Yanet Ojeda, Egidio Páez y Catherine Murphy, *La Agricultura Urbana en Cuba*, 2002.
- Oficina Nacional de Estadísticas, *Anuario Estadístico de Cuba 1989, 1998, 2001, 2005*.
- Omar Everlenny Pérez Villanueva ed., *Cuba: Reflexiones sobre su economía*, Universidad de La Habana, La Habana, 2002.
- Primera Ley de Reforma Agraria, en *Seis Leyes de la Revolución*, Editorial de Ciencias Sociales, La Habana, 1973.
- María Caridad Cruz y Roberto Sánchez Medina, *Agricultura y Ciudad: Una clave para la sustentabilidad*, Fundación Antonio Nuñez Jiménez de la Naturaleza y el Hombre, La Habana, 2001.
- Peter Rosset and Medea Benjamin ed., *The Greening of the Revolution: Cuba's experiment with organic agriculture*, Ocean Press, Melbourne, 1994.
- *Tesis del Movimiento Revolucionario 26 de Julio*, Editorial Lex, La Habana, 1959.
- Víctor M. Figueroa Albelo, "Reestructuración del Sistema Agrario en los Noventa: Desafíos de los Agricultura Mixta" en Manuel Monereo, Miguel riera, Juan Valdés ed., *Cuba Contruyendo futuro*, El Viejo Topo, España, 2000.
- Viviana Togores and Anicia García, "Consumption, Markets, and Monetary Duality in Cuba" in Jorge I. Domínguez, Omar Everlenny Pérez Villanueva and Lorena Barberia ed., *The Cuban Economy at the Start of the Twenty-First Century*, Harvard University Press, Cambridge, 2004.

---

<sup>1</sup> その他、日本語で出版されたキューバに有機農業に関する本・視察報告には、主要なものとして、次のものがある。金子美登、尾瀬あきら、吉田太郎『21世紀のモデル、キューバの有機農業』（共学舎出版企画、2000年）、首都圏コープ事業連合編『有機農業大国キューバの風』（緑風出版、2002年）、吉田太郎『1000万人が反グローバリズムで自給・自立でき

るわけ』(築地書館、2004年)、有機農業推進議員連盟「キューバ有機農業視察(2006年4月28日-5月8日)」。

<sup>2</sup> José Alvarez, *Cuba's Agricultural Sector*, University Press of Florida, Florida, 2004, pp.257-258.

<sup>3</sup> 実際、筆者が面談した有機農業担当の農業相補佐官のフアン・ホセ・レオン・ベラ氏は、「有機農業生産高の統計はない。しかし、農薬の使用には許可があるので、都市農業で320万トンから360万トン生産されているものは、有機農産物である」と述べた。都市農業の生産高についても公式の統計は発表されていない。2006年5月の都市農業の会議で、411万トンの生産が報告され、その数字の信憑性にハバナ大学のアルマンド・ノバ教授が疑問を提起したところ、農業省は再調査すると述べたが、結局そのままになった。同教授によると集計作業の正確性に疑問があるとのことである。

<sup>4</sup> José Alvarez, *op.cit.*, p.257.

<sup>5</sup> 2006年9月、ノバ教授との筆者インタビュー。

<sup>6</sup> 筆者の友人であるカステヨン教授は、ハバナ大学付属のキューバ経済研究所(CEEC)の研究員、ハバナ大学教授であったが、2006年3月のある夜、自転車で帰宅途中、交通事故に会い46歳の若さで死去した。惜しまれる死であった。本稿は、教授の遺作である。心からご冥福をお祈りする次第である。

<sup>7</sup> Armando Nova, *La Agricultura en Cuba: Evolución y trayectoria*, Ciencias Sociales, La Habana, p.285; Oficina Nacional de Estadísticas, *Anuario Estadístico de Cuba 2005*.

<sup>8</sup> C. Anicia García Álvarez y Lic. Betsy Anaya Cruz, *Política social en Cuba, nuevos enfoques y programas recientes*, La Habana, 2006, inédito. なお、現在平均月額賃金は、390ペソ、市中の公的外貨交換所で1ドル=26ペソである。したがって、ドル計算からすれば、1ドル35セント(160円)程度で一ヶ月の半分程度食べられるという計算になる。しかし、残りの半分を自由市場で買うとなると、家族4人で共稼ぎと仮定した場合、収入の80%以上を食費に当てなければならない。極めて高いエンゲル係数である。

<sup>9</sup> 比較的客観的な報道を行うIPSのパトリシア・グロググ記者の調査では、配給品は、30-40%にしか達しないという。

<sup>10</sup> *Granma*, Febrero 26 de 2007. なお、全国統計庁によれば、2004年度の食料の輸入は、10億ドルであったが、05年度は、農業が不振で18億ドル輸入した(Oficina Nacional de Estadísticas, *Anuario Estadístico de Cuba, 2005*)。2006年度もほぼ同額の18億ドル輸入した(IPS, Febrero 28, 2007)。しかも、そのうち5億7,000万ドルは米国からの輸入である(*Cuba Business*, June 7, 2007, Vol.15, No.6)。米国政府は、1962年からキューバへの経済封鎖(禁輸)政策をとっているが、2001年より医薬品と食料の輸出を解除した。

<sup>11</sup> Discurso pronunciado por Carlos Lage en la Reunión de Presidentes Municipales del Poder Popular del 2 de junio de 2007, *Granma*, 4 de junio de 2007.

<sup>12</sup> Radio Habana Cuba, Agricultura en Cuba,

<http://www.radiohc.cu/espanol/agricultura/agricultura/lucea.htm>

<sup>13</sup> L.ヒューバーマン/P.M.スウィーザー『キューバ—一つの革命の解剖—』池上幹徳訳(岩波新書、1960年)16ページ。

<sup>14</sup> José Martí, "El Tratado Comercial entre Los Estados Unidos y México", en *Obras Escogidas Tomo I*, Editora Política, La Habana, 1978, p.340

<sup>15</sup> フィデル・カストロ「歴史は私に無罪を宣告するであろう」、フィデル・カストロ『わがキューバ革命』池上幹徳訳(理論社、1961年)所収、62ページ。

<sup>16</sup> *Tesis del Movimiento Revolucionario 26 de Julio*, Editorial Lex, La Habana, 1959, p.95.

<sup>17</sup> Primera Ley de Reforma Agraria, en *Seis Leyes de la Revolución*, Editorial de Ciencias Sociales, La Habana, 1973, p.21.

<sup>18</sup> Jorge I. Domínguez, *To Make a World Safe for Revolution: Cuba's Foreign Policy*, Harvard University Press, Cambridge, 1989, p.66.

19 Miguel Alejandro Figueras, *Aspectos Estructurales de la Economía Cubana*, Editorial de Ciencias Sociales, La Habana, 1994, p.53.

20 Víctor M. Figueroa Albelo, “Reestructuración del Sistema Agrario en los Noventa: Desafíos de los Agricultura Mixta” en Manuel Monereo, Miguel riera, Juan Valdés ed., *Cuba Contruyendo futuro*, El Viejo Topo, España, 2000, p.159. 新藤通弘『現代キューバ経済史』(大村書店、2000年) 89 ページ。

21 こうした農業モデルの行き詰まりを打開すべく、ラウル・カストロ国防相の指導により、1987年12月から、国防省傘下の農場でオルガノポニコ農業が本格的に進められることになった(*Granma*, Enero 7, 2003)。

22 Víctor Figueroa, *op.cit.*, p.159.

23 オマール・エベルレニ・ビジャヌエバ、新藤通弘訳「21世紀におけるキューバ経済—前進と挑戦」『アジア・アフリカ研究』2004年第376号 29-57 ページ参照。

24 キューバは、公式には、統計上は1ドル=1ペソで計算している。公的自由交換市場では1ドル=25-26ペソであるが、これを基礎に計算するとまったく実情が分からなくなる。研究者がいろいろな分析で陥る落とし穴である。

25 Adolfo Rodríguez Nodals y Nelso Companioni Concepción, *Situación actual, perspectivas y retos de la Agricultura Urbana en Cuba*, INIFAT, La Habana, 2006, inédito. 栽培面積が6万~7万と異なるのは、季節によって栽培面積が異なるためである。

26 グランマ紙などでは、都市農業で400万トン生産されたと報道されている。しかし、それが事実とすると、収穫率は、1平方メートル当たり60kgとなり、極めて高い収穫率となる。一方、都市農業専門家の報告でも、もっとも収穫率が高いオルガノポニコでも20kg/m<sup>2</sup>、集約菜園・一般菜園・家庭菜園で10kg/m<sup>2</sup>である(Nelso Companioni, Yanet Ojeda, Egidio Páez y Catherine Murphy, *La Agricultura Urbana en Cuba*, 2002, p.97)。仮に20kg/m<sup>2</sup>を採用すると、7万メートルで年間140万トンとなる。ノバ教授も疑問視するように、400万トンという数字にはわかには信じがたい。ちなみに従来のキューバ、ラテンアメリカの収穫率は〈表3〉の通りである。

27 法制的には、その後の政令で認められることになるが、現在のキューバの政治権力構造においては、共産党の重要な会議において決定されたことが法律や政令となって実施される。こうした政治権力構造は、また別の一面で、政府の都市農業政策が、ほぼ専一的な資材の供給、生産物の買付を通じて、国営農場、協同組合生産基礎組織(UBPC)、農業生産協同組合(CPA)、信用・サービス協同組合(CCS)、自営農、都市農業従事者によって一貫して推進される基盤ともなっている。

28 *Granma*, Febrero 3, 2002.

29 IPS, *Resumen Económico Anual 2001*, La Habana, p.15.

30 *Granma*, Enero 7, 2003.

31 キューバ全土の5.2%に属する。

32 *Granma*, Enero 7, 2003. 2002年には、オルガニポニコは、全国で3,819箇所あり、1,183.4メートルで栽培されていた(*Granma*, Enero 6, 2006)。

33 2001年には全国で7,189の集約菜園が3,953メートルで栽培されていた(Adolfo Rodríguez Nodals y Nelso Companioni Concepción, *Situación actual, perspectivas y retos de la Agricultura Urbana en Cuba*, INIFAT, La Habana, 2006, inédito)。

34 *Granma*, Enero 6, 2006.

35 Nelso Companioni, Yanet Ojeda, Egidio Páez y Catherine Murphy, *La Agricultura Urbana en Cuba*, 2002, p.99.

36 *Granma*, Diciembre 29, 2006.

37 例えば、*Granma*, Diciembre 25, 2006. また、吉田太郎『200万都市が有機野菜で自給できるわけ—都市農業大国キューバ・レポート—』(築地書館、2002年) 89 ページ。

38 西尾道徳『有機栽培の基礎知識』(農文協、2003年) 57-61 ページ。

39 Entrevista a Adolfo Rodríguez por Carlos Iglesias, 2004, La Habana, inédito.

40 2005年9月、筆者インタビュー。

41 Fernando Funes, Luis García, Martin Bourque, Nilda Pérez, and Peter Rosset ed.,

---

*Sustainable Agriculture and Resistance: Transforming Food Production in Cuba*, Food First Books, Oakland, 2002, p.17.なお、実際の全栽培面積は400万<sup>ヘクタール</sup>強である。

<sup>42</sup> IPS, *Resumen Económico* 2005, La Habana, p.31 y 2006, p.46.

<sup>43</sup> Viviana Togores and Anicia García, “Consumption, Markets, and Monetary Duality in Cuba” in Jorge I. Domínguez, Omar Everleny Pérez Villanueva and Lorena Barberia ed., *The Cuban Economy at the Start of the Twenty-First Century*, Harvard University Press, Cambridge, 2004, p.257.

<sup>44</sup> Prensa Latina, *¿Hacia dónde va el comercio exterior cubano?*, Abril 19, 2007. 2006年、サービス輸出は、75億<sup>ドル</sup>程度に達した。その内訳は、観光、25億<sup>ドル</sup>、医療・文化・スポーツ輸出が50億<sup>ドル</sup>と推計される。

<sup>45</sup> 詳細は、拙稿「キューバ経済構造の歴史的変容」、『軍縮地球市民』No.6、2006及び「正念場を迎えたキューバ経済」、『雑誌経済』2006年9月号を参照こう。

<sup>46</sup> Leo Huberman and Paul M. Sweezy, *Cuba: Anatomy of a Revolution*, Monthly Review Press, New York, 1961, p.3.

<sup>47</sup> 日本の総務庁の規定では、都市とは、DID地区（市町村の区域内で人口密度4,000人/km<sup>2</sup>以上の人口集中区が隣接している地域で、その合計人口が5,000人以上となる地域）とし、また農村とは非DID地区としている。キューバでは、2,000人以上の人口密集地で、上水道、学校、病院施設があるところを都市区域とし、それ以外を農村区域としている。したがって、通常われわれが考える以下の区域が農村として考えられている。つまり農村人口は、日本の規定からすれば、さらに増えるものと思われる。

<sup>48</sup> Miguel Alejandro Figueras, *op.cit.*, p.59.

<sup>49</sup> *Granma*, Diciembre 23, 2006.